

リチャード・ホフスタッターと知識人の使命——多元性を求めて

愛甲 雄一

Richard Hofstadter and the Mission of Intellectuals: In Pursue of Plurality

AIKO Yuichi

Abstract

The issue of anti-intellectualism has been widely discussed in Japan for the last few years, but only a cursory glance has been given to Richard Hofstadter in this debate. This relative neglect is regrettable not just because this American historian is the author of *Anti-Intellectualism in American Life* (1963) but also because his intellectual life itself was a struggle against what he called anti-intellectualism in America. The purpose of this paper is to fill this gap; it also aims to induce Japanese intellectuals to discuss further about their own roles in the future of the Japanese society.

This paper focuses on Hofstadter's scholarly life in mid-twentieth century America. His intellectual career had been guided by his strong sense of duty as an intellectual, which he acquired when he was still a junior scholar. In Hofstadter's belief the duty of intellectuals lies in resisting any social, political, and cultural force that coerces conformism, and also in defending the plurality of society. *Anti-Intellectualism* is surely his most important contribution in this regard, but this sense of mission also underlies in his other works.

キーワード：リチャード・ホフスタッター、反知性主義、知性、知識人

key words: Richard Hofstadter, anti-intellectualism, intellect, intellectuals

1. はじめに

反知性主義 (anti-intellectualism)。この言葉は、2014年頃から日本の論壇上を突如として賑わせるに至った、いわゆる「バズ・ワード」のひとつである。この間に反知性主義を冠した書物、雑誌の特集号、諸論考が次々と現れ、日本の知的空間にしばしの活況が訪れた。だが周知のとおり、この日本語としてややこなれない言葉は、故リチャード・ホフスタッター (Richard Hofstadter: 1916-1970) が1963年に著したピューリッツァー賞受賞作『アメリカの反知性主義 *Anti-Intellectualism in American Life*』(Hofstadter 1963、以下『反知性主義』と略称¹⁾) に、その淵源をもつ。本稿では、このホフスタッター自身の知的遍歴を辿りつつ、彼が知性や知識人の役割をどう見ていたのかを明らかにしたい。

反知性主義という言葉が広く人口に膾炙し始めたのは、冒頭でも触れたように、日本ではごく最近のことである。その発端は、ポピュリストの人気を集める一部の政治家や言論人による攻撃的な言葉遣い、その彼らに陰に陽に支持を与える——あるいは、彼らの跋扈を許す「空気」を形作っている——一部メディア・ネット右翼・ヘイトスピーチ団体などの扇動的で口汚い言説に対し、それらを批判するものとしてこの「反知性主義」が用いられたことにあった(笠井・白井2014、佐藤2015、佐藤・斎藤2015、内田2015、小田嶋2015)。だが、そこでの攻撃対象の多くが一般には政治上の「右派」と目される人物や言説であったことから、その言葉は当初から、ある種の政治的党派性を帯びることになる。結局この論争では感情的な罵り合いも目立ち²⁾、現時点においては、

それが実りある成果をもたらしてきたとは必ずしも言い難い。そんな中、多くの論者はホフスタッターの『反知性主義』に言及はするものの、彼が同書を執筆した思想上の背景やその知識人観を析出した論考は、今のところ皆無である³⁾。

他方、アメリカ政治に近年「反知性的」な人物——ジョージ・W・ブッシュ元大統領など——が登場したこともあって、その文脈で『反知性主義』が話題にされることは、日本のアメリカ研究者の間ではある程度以前から行なわれてきた(巽2008)。その最新の事例が、米国キリスト教史における反知性主義を論じた森本あんりの『反知性主義——アメリカが生んだ「熱病」の正体』(2015年)である。ただ同書の議論はホフスタッターの理解とは対照的に、アメリカの反知性主義的伝統を「知性と権力との固定的な結びつき」を突き崩してくれるもの、「既存の秩序とは違う新しい価値の世界を切り拓いてくれる」ものとして捉えている(森本2015: 275)。この視点は日本での反知性主義論争にひとつの新しい地平をもたらしたとも言え、その意味では極めて興味深い。だが他方で、筆者自身の観点からすれば、それがホフスタッターに関しての理解を深めるものではなかったことも、また事実である。

誤解しないでほしいのだが、筆者はここで、ホフスタッターの反知性主義論のみが正統であり、日本の反知性主義論は常にこの「元祖」の議論や意図を汲み取るべきだ、と主張しているわけではない。半世紀近くも前に物故した人物によるそのアメリカ論は、ある意味では、現代日本を語る上でひとつの参考以上の意味しか持ち得ないだろう。だが、そこに潜むホフスタッターの思想的背景や知識人観に焦点を当てる本稿の試みは、少なくともここ日本では、やはり重要な意義を有すと言える。その理由として、以下の二点を挙げることができる。

第一に、かつて「アメリカ史学界の第一人者の一人」(斎藤1988: 293)に挙げられ、著作の邦訳も複数存在しながら、ホフスタッターの議論や思想に焦点を当てた研究は、本邦ではこれまでほとんど存在してこなかった。管見の限りでは、彼の

一部業績に触れた論考がわずかにあるのみで(岩永1951、泉1974)、それも近年のものはまったく見当たらない。このことを前提にするなら、昨今の反知性主義論争で『反知性主義』以外の彼の著作に話が及ぶことがなかったのも、言わば当然であろう。ところが実は、ホフスタッターの地元アメリカでも、事情はさほど大きくは変わらない⁴⁾。こうした観点からすれば、本稿は、この研究上の空白を埋めることにおいて一定の貢献を為すものと思われる。

第二に、ホフスタッターの知識人観やその背後にある思想を明らかにすることは、現代日本の反知性主義論争に、やはりひとつの意味ある知見を提供するはずである。彼がアメリカの反知性主義に批判を突きつけたのは、その広まりによって、社会の多元性が後退する危険があったからだ。そしてホフスタッターによれば、そうした動きへの抵抗こそが、知性の果たすべき役割に他ならない。したがってこの点を示すことは、反知性主義という言葉がしばしば「敵」を叩くだけの道具と化している日本の現況を見直し、知性と社会との関係を探究するより本質的な議論を深化させていく際の、ひとつの出発点となり得よう。またこの作業は、今後の日本において知性や知識人の役割を再考していく上での、ひとつの重要な手がかりにもなるのではあるまいか。

以下の議論は、次の順番で進められる。まず次節では、『反知性主義』の概要ならびにホフスタッターが同書を執筆した動機に関する仮説を提示しておく。続いて、彼の知識人観およびそれが成立していった背景について確認しておくことにしよう。その知識人観を抱いて社会の多元性を擁護した彼の知的遍歴を辿っていくことが、次の節の課題である。最終節では、以上の議論から導かれる本稿の結論を簡単に述べることにしたい。

2. 『反知性主義』とその執筆事情

反知性主義という思想傾向がアメリカに根強く存在する原因を、ほぼ時系列順に辿った作品——それがホフスタッターの『反知性主義』である(Hofstadter 1963)。彼の言う反知性主義とは「精

神に重きを置く生活や、そうした生活を代表すると考えられる人びとに対する恨み・疑いの気持ち、さらに、そうした生活の価値を常に最小限に留めようとする傾向」を意味する。その中で人びとの敵意や憎悪の対象にされるのが、「知識人 intellectuals」である。そしてホフスタッターによれば、知識人に対する否定の感情や批判的な時代思潮は、以下のような過程を経てアメリカ社会の中に浸透していったという。

建国期以前に反知性主義を定着させた最大の原因は、福音主義の伝統である。それは、直観や情緒的反応を信仰実践の中心に据え、また実用性という価値基準を宗教に持ち込むことで、既存の主知主義的な教義学説・教会内エリートの影響力を後退させていった。近代化が急激に進行した19世紀末以降、反合理主義的思考——進化論の否定など——を社会に根付かせたのも、この福音主義である。さらにそれは、知識人やエリートではなく大衆に、それも彼らの道徳的感性に信を置くという形で、「デモクラシー」とも結び付いていく。というのも、その社会倫理としてのデモクラシーは、政治エリートに対する大衆の反発を正当化し、「一般庶民 the common man」の直観力と行動力を称揚するものだからである。よって当然、社会の複雑化に伴い政治の世界で活躍し出した「専門家」たちも、こうしたデモクラシーからの圧力に抗し得ない。その結果、アメリカの政治では、ホフスタッターによれば、感情的な道徳判断を優先した反知性主義がしばしば支配することになる。

一方、南北戦争後の産業主義の時代に新たに登場したのが、非エリート層出身の実業家たちである。彼らの理想とする人物像は、文化的素養ではなく実用的能力、教養や知性ではなく直接的経験に富む「たたき上げの人物 self-made man」であり、実業教育や職業訓練がアメリカ学校教育において主流化したのも、彼らのそうした反知性主義的価値観が社会に浸透したからであった。だがそうした教育上の変化は、「民主的」な教育の実現を目指した教育者たちの「改革」とも、密接に関連していたという。その教育の目的は有用な「アメリカ市民」の育成に他ならず、そこでは「学問に無

関心で才能もない子ども」が「一種の文化的英雄」へと祭り上げられていく。知性を伸ばす教養教育、個々の能力に要求を突きつけていくタイプの教育は回避され、反知性主義に抗するための社会的基盤は、ますますやせ細っていくことになる。

以上のような内容を骨子とする『反知性主義』は「今日に至るまで、最もよく知られたホフスタッター作品のひとつであり続けてきた」(Brown 2006: 138)。出版直後から学界の内外で多数の読者を獲得し、同書がピューリッツァー賞を受賞するほどの評判の書となったことも、周知の如くである。だが他方で、現在の反知性主義論争ではほとんど注目されないが、それは当時、同僚の歴史家たちから激しく糾弾された作品でもあった。ダニエル・ブーアスティンによれば、『反知性主義』は結局のところホフスタッターが属す特権的知識人階級に加担するものであり、デモクラシーの果たしてきた諸成果への公平な評価を欠いている (Boorstin 1963)。要するにそれは、著者の「エリート主義」の発露だ、というわけである (Lynn 1963)。さらに、『反知性主義』に見られるその単純な分析枠組みに対しても、批判が少なからず寄せられてきた。たとえば知性対反知性、知識人対一般大衆という二項対立図式をハロルド・ローゼンバーグは取り上げ、それが実際の歴史の複雑さや多面性を無視していることに、不満を示す (Rosenberg 1963)。『反知性主義』のそうした側面についてパウラ・ファスは、それが「発見すると設定したものだけを過去から抜き取る」著者のアナクロニズムに起因するものだ、と後にやはり批判している (Fass 1983: 223)。

こうした問題点には自身でも気付いていたせいかな、ホフスタッターは、序文で本著作が「正式な歴史書ではない」「個人的な作品」だという苦しい弁解を行なっている (Hofstadter 1963: vii)。ではなぜ彼は、難ある旨を自ら認識していたこの作品を、あえて上梓したのだろうか。本書の執筆理由としては、1950年代初頭に起きたマッカーシズムなどがしばしば指摘され、実際そうしたことへの言及が本書にはある。だが、『反知性主義』の出版(1963年)はそうした諸事象から10

年も後のことであり、またホフスタッター自身も認めるように、1957年のスプートニク・ショックを経たアメリカでは、反知性主義は一時沈静化していた。しかも、1960年にジョン・F・ケネディが大統領に選出された後には、政治と知性との結び付きすら少なからず復活していたという(Hofstadter 1963: 4-5, 227-9)。とするなら、60年代初頭に彼が反知性主義を批判すべき緊急性は、客観的には相当に減じていたことになろう。

このことは、同書に示された問題意識が出版当時の政治や社会状況に動かされた刹那的な危機感から来ていたというより、むしろそれがホフスタッターの継続的な関心事であったことを示唆する。実際、『反知性主義』の一部は彼がかつて発表した論考に手を加えたものであり、その最も古いものは、1953年にまで遡り得る(Hofstadter 1953)。ならば、ホフスタッターの反知性主義に対する批判的姿勢は、彼自身の実存や思想にまで深く関わっていた可能性が高い。そう考えると、本書が「歴史書」としては不十分なものに終わったことも、知性の擁護というホフスタッターの強い使命感がもたらした結果——ないし勇み足——と解釈することが、一応は可能である⁵⁾。

この見方が正しいとして、ならば、ホフスタッターの知性をめぐるそうした使命感は、どのようにして形成されたのだろうか。次節では、この点について検討していくことにしたい。

3. ホフスタッターの知識人観とその思想的・学問的背景

(1) 知識人の知性とは

ホフスタッターが知性や知識人に関する自身の見方を初めて明確にしたのは、1950年代初頭のことである。『反知性主義』での彼は「知能 intelligence」と「知性 intellect」とを区分し、前者は物事を「把握し、処理し、再秩序化し、調整する」能力、後者は「検証し、熟考し、疑い、理論化し、批判し、想像する」能力と定義している(Hofstadter 1963: 24)。しかしこの違いは、その世紀半ばの時点において、既にはっきりと彼には意識されていた。その両者の違いを当時のホフス

タターはヴェーバーに倣い、「知に頼る生 lives off ideas」と「知のための生 lives for ideas」とに分けて、以下のように説明している(Hofstadter 1953)。

「知に頼る生」では既存の知がただ純粹に道具として利用されるのみであり、よってこの生を送る者は、知性を行使する「知識人 intellectuals」のうちには数えられない。一方、「知のための生」を生きる知識人であるためには知への、さらには知に身を捧げる生そのものへの「信仰 piety」がまずは必要である。ホフスタッターによれば、この「信仰」においては、思考とはまさに祈りに等しい。神への献身ならぬ真実の追求に対する献身こそが、そこでは何物にも代え難い重要性を帯びるのである。だが、こうした知識人の「信仰」もまた、宗教信仰と同じく、度が過ぎれば狂信へと墮す。ゆえに、そうした偏りを是正するためにも知識人にはもうひとつ別の資質、すなわち「精神の遊び the play of the mind」が必要だ、とホフスタッターは言う。ここでの「精神の遊び」とは、思考が活動を続け、一つ所に留まり続けられない状態のことを指す。この資質は知識人の思考を単一の価値や目的——たとえば、日常的な意味での「実用性 practicality」——から解き放つ、その意味での自由を彼の知性に帯同させることだろう。この自由が「信仰」の行き過ぎによる狂信や他者への強要を抑止してくれる、というわけだ。だがもちろん、この「精神の遊び」も過剰になれば、細部への異常な拘りや単なる素人の道楽趣味、皮肉癖などに陥ることは必至である。したがって、この「信仰」と「精神の遊び」の「バランスを満たすことが、知識人であることの本質を成す」。

以上の説明から、知性はひとつの信念や思想に凝り固まることの対極にあるとホフスタッターが考えていたことは、明らかであろう。彼が「知のための生 lives for ideas」を「ひとつの知のための生 lives for an idea」とは区別していたことから、この点は明白である。この区分によって、知への関心が限られた政治的価値や特定政党の指針などに資するだけの場合、その人物がいかにもすぐれた知的精神の持ち主であろうと——たとえばレーニ

ン——その者は彼の考える知識人ではない、とホフスタッターは主張している。知識人は本質的に大勢とは協調しない、常に何かに挑戦するノン・コンフォーマリストであるはずだ、というわけだ。「知性はいつでも何かに反対して動いている。何らかの抑圧や欺瞞、幻想、ドグマ、利害は絶えず知識人階級による査察の対象に置かれ、暴露や怒り、嘲笑の対象となる」(Hofstadter 1963: 45)。同調をよしとせず、すべてを不確かなものにさせるこの知性の傾向こそ、反知性主義者の観点からすると、知識人が危険分子と化す所以であろう。だが実はここに、知識人が果たすべき真の役割がある。彼らの自由な発言が既存の硬直した「真理」に挑戦できるところでは、社会は常に新たな可能性や改善へと開かれていく。だから、ホフスタッターからすれば、「知性の力の自由な行使を許すよりも否定した時、その社会はずっと悪い方向に進むだろう」(Ibid.)。知識人が自らの知性を存分に振るうことは、より良き社会を実現させる上での、彼らに課せられた使命とも言えるものなのである。

(2) 若き知識人ホフスタッターの誕生と知性の役割

こうしたホフスタッターの知性観や知識人観の表明が1950年代初頭の出来事、すなわち、多くの知識人が「赤狩り」の対象になったマッカーシズムと、「非凡な」アンドレイ・ステイーヴンソンが「凡庸な」アイゼンハワーに大敗した1952年のアメリカ大統領選とに刺激されてのものであったことは、確実である。前者においては「アメリカにおける批判精神の破滅的な無視」、後者においては「アメリカによる知識人の否認」が生じたという意味で、それは確かにホフスタッターからすると、危機的な事件であった(Ibid.: 3-4)。だが、知性や知識人の使命に関する彼の確信は、知的訓練を積み上げていったそれまでの過程の中でとうに確立していた、と本稿は主張したい。社会での果たすべき役割を自覚した知識人・ホフスタッターは、50年代初頭には既に誕生していたのである。

このひとりの知識人の誕生において、ホフス

タッター自身の性格が関与していたことに、おそらく疑いの余地はない。わずか10歳の時に母の死を迎えるなどした結果、年少の頃より彼は、人間の生とは根本的に悲劇的なものだ、と考える人物であった(Kazin 1971: 398)。この生来の悲観主義がすべての事象に対する懐疑主義、後に多くの知人たちが指摘する「気質上の保守主義」をホフスタッターの中に作り上げた可能性は、十分にある(Schlesinger, Jr. 1969: 279)。そして確かにこの性格は、熱狂とは対極のものを要求する冷めた知性の行使とは相性が良いと言えよう。だが、ホフスタッターの知識人観は、後に歴史家となる彼の若き時代の知的訓練を経ることなしには、やはり形成され得なかった。そしてその最初の大きな出来事が、この時期の彼に大きな影響を与えたマルクス主義との出会い、ないし対決だったのである。

彼が学生時代を過ごした1930年代から40年代前半は、「世界規模ではすさまじい紛争が、アメリカ国内政治では激しく活発な論争が戦われ」、「世界大で演じられていたイデオロギーをめぐる闘争と同様のものが、アメリカでも観察され得た」時代であった(Hofstadter 1956: 361)。こうした時代の動きはホフスタッターすらも「活動家」に変え、1933年に地元バッファロー大学へと進学した彼は、左派系学生団体の政治運動に参加している。学士課程が修了した1936年には政治的急進派のフェリス・スウェイドスと結婚(1945年に死別)、その彼女とともに、国内では当時最も左派的であったとされるニューヨークに移住した。翌年にはコロンビア大学の大学院生となり(1942年まで在籍)、1938年10月からわずか4カ月のことに過ぎないが、共産党に属していた時期すらある。この間、同世代の多くがそうであったようにマルクス主義思想の洗礼を受け、資本主義はもとよりニューディールにも当時の彼は否定的な見方をしていたという(Singal 1984: 981)。

だが、この「人生で最も政治的にアクティヴだった時期」でさえ、ピーター・ゲイによれば、ホフスタッターは「非常に懐疑的な類いのリベラル」でしかなかった(Brown 2006: 11, 24)。正統派左

翼たちの熱狂に染まるどころか、1940年代の初めには、彼は既に多くの疑問をマルクス主義に抱くようになっていたらしい (Gillam 1977/78: 71-2)。これには、彼の懐疑主義的性格もさることながら、スターリンの粛清 (1936-8年) や独ソ不可侵条約 (1939年) などの左派政治に対する幻滅が、決定的効果をもったようである。これらの出来事は、階級利益と政治・イデオロギーをめぐるマルクス主義の「科学的」説明に対し、ホフスタッターの中に強い疑いを芽生えさせる上で、十分過ぎるものであった (Singal 1984: 981)。と同時にそれは、人間に関わる事象はすべからず複雑だという事実と、それを単純化しようとする力学に抵抗していく必要性とを、彼に教えたのである。

ただし、党派的な類いのマルクス主義からホフスタッターが袂を分かったことは確かだが、そのすべてを彼が拒否したわけではない。マルクス主義の影響下で執筆されたと後に彼が述べることになる『アメリカの政治的伝統』(1948年)は (Hofstadter 1968a: 452)、「公的な指導者の地位にある者に極度に寛大であるよりは、極度に批判的である方が、民主的社會ではより安全」(Hofstadter 1948: xi) という批判意識の下に、執筆されたものだ。実際、ジェファソンやリンカーン、両ローズヴェルトなどの有名政治家たちに向けられたホフスタッターの評価は辛辣で、時に偶像破壊的ですらある⁶⁾。彼の友人であったアルフレッド・カジンによれば、彼らの世代は「急進派」ではなくなった後も、「権力への懐疑主義」だけは持ち続けたという (Kazin 1971: 399-400)。学生時代のホフスタッターが自身のアイデンティティを父方に由来する「マイノリティ」のユダヤ人——ただし非宗教的でコスモポリタンなそれ——に求めたのも (Fass 1983: 213)、穿った見方をすれば、社会の「周辺」における疎外の問題に注目するマルクス主義の影響であった可能性がある。また、マルクス主義がホフスタッターに残した刻印は彼の思考法にも及び、スーザン・スタウト・ベイカーの研究では、歴史的発展に関する弁証法的理解が彼の作品においては常に「導きの糸」であり続けた点が、詳らかにされている (Baker 1985)。

以上のように、マルクス主義とそれに対する批判意識の芽生えは、ホフスタッターの知性観や知識人観の形成において、多様な意味で重要であった。そこでの知的格闘の成果は、物事を単純に捉えることへの疑いの意識や、権力や主流派に果敢に対峙していく政治的な姿勢、さらに、歴史や人間事象の複雑さ・アイロニーを理解しようとする視線を彼に身に付けさせたのではなかったか。その最初の萌芽は、バッファロー時代の学生・ホフスタッターが革新主義学派の歴史学、特にチャールズ・ビアードのそれを批判したことの中に、見出し得る。当時の彼が触れ得たビアードの歴史学 (Hawke 1960: 141) は、政治を経済の関数と見なす立場から既存のアメリカ史理解に挑戦する、実にラディカルなものであった。その偶像破壊ぶりが若きホフスタッターを魅了したであろうことは、想像に難くない。だが他方で、その頃の彼の恩師ジュリウス・プラットは、革新主義学派の——翻ってマルクス主義の——経済決定論に批判的な、思想が政治に果たす役割にも着目するアメリカ外交史家であった。そのプラットの影響を受けて書かれた卒業論文の中で、ホフスタッターは、南北戦争前における両地域の対立原因を経済に帰したビアードの『アメリカ文明の興隆』(1927年)を批判し、人種間対立の側面を強調している (Brown 2006: 14-5)⁷⁾。ここに、歴史の複眼的理解に努め、影響力ある正統派の解釈にも果敢にオルタナティブを突きつけていく若き歴史家・ホフスタッターのスタートが切られた、と言ってよい。

こうした彼の姿勢は続く大学院での研究で、さらに新しい地平を獲得していった。当時「周囲で燃え盛っていた争いに対する自然な知的反応」として「イデオロギーの形成や発展に関する研究に関心」を抱くようになっていったホフスタッターは (Hofstadter 1956: 361)、博士論文のテーマに、急速な産業化が進んだ南北戦争以降のアメリカで、ダーウィンによる適者生存の法則が社会学者たちにどう活用されたかの分析を選択する。これが彼初めての単著『アメリカ思想における社会ダーウィニズム』(1944年)に結実するわけだが、その中で彼は、競争ビジネス社会の合理化か

らデューイ流の革新主義的改革の正当化に至るまで、その進化論思想が様々なイデオロギー上の立場に利用される様を明らかにした (Hofstadter 1955a)。この研究を通じてホフスタッターは、思想が「社会において機能する向きや影響力は、人間による選択、それもしばしば道徳上の選択によって左右されるものであり、そこに内在する論理や元来そこに備わっている何らかの科学的『真理性』に左右されるものではない」と確信する (Fass 1983: 214)。ここにあるのは、思想の意味はそれを発する主体の主観的認識によって制約される、としたカール・マンハイムの「存在拘束性」論と共通のものに他ならない。実際、ホフスタッターによれば「マンハイムが、私の求め続けていた思想と社会状況との間の関係性を教えてくれたのである」 (Hofstadter 1956: 362)⁸⁾。この出会いによって彼はさらに、思想が多元的な意味を持つことへの理解とともに、客観性・科学性・道義性などを標榜する思想やイデオロギーに対する懐疑を深めていく。マンハイムの示した階級的利益に囚われない「自由な浮動する知識人」像も、ホフスタッターにおける理想的知識人像の形成にこの時少なからず影響したのかもしれない。

ホフスタッター二冊目の単著となる『アメリカの政治的伝統』(1948年)は、こうした流れの延長上に執筆されたものである。それは、先述のとおり多くの政治家や権力者を批判した作品であったが、当時流行していた感傷的な懐古趣味、さらに過去の「英雄」や発展を礼賛する愛国的なアメリカ史学を批判した作品でもあった⁹⁾。しかも興味深いのは、アメリカ史には深刻なイデオロギー上の対立が存在しないとすするいわゆる「コンセンサス学派」の代表的著作に本書がかつて挙げられ (Higham 1959)、その是非がこれまで様々な論じられる中で¹⁰⁾、ホフスタッター自身は、同学派による指摘が当時持っていた批判力——それまでの歴史学における過度の単純化や見落としを再考させる力——を積極的に評価していたことである (Hofstadter 1968b: 17-8)。ここに、批判を以て旨とする知識人・ホフスタッターが完全に誕生したと言っても、間違いはなからう。そしてそ

の姿勢は、彼がこの時期新たに社会科学の成果に触れたことによって、さらに強固なものになっていったと言える。

ホフスタッターは博士号取得後の1942年から4年間メリーランド大学に在籍した後、1946年にコロンビア大学に戻っているが、この頃に行なわれたライト・ミルズなどとの交流を通じて、社会学や社会心理学への知見を深めていった (Brown 2006: 72-3)。これら社会科学は、その方法論上の新しさもさることながら、それまでの歴史学では無視されてきた問題領域に目を見開かせてくれたという点で、彼には有益なものに映る (Hofstadter 1956: 363-4)。それは、とりわけ独ソ不可侵条約締結のような、一見非合理的な政治判断の理解に役立つ、との認識から確信へと変わったようだ (Hofstadter 1968b: 17-8)。このホフスタッターの新たに獲得されたアプローチは、1952年に発表された論文「マニフェスト・デスティニーとフィリピン」において、最初の成果として現れる。米西戦争後のフィリピン領有を後押ししたアメリカ社会の心理を分析した本論文の中で、ホフスタッターは、経済合理的な理由などよりむしろ「1890年代に起きた心理上の危機」という社会心理面からこの領土拡大はよりよく説明される、と論じたのである (Hofstadter 1952)。

だが、歴史事象の適切な理解に寄与するとの認識がホフスタッターにあったとは言え、そうした社会科学の導入が解の完全なる「客観性」を保証するとの意識は、彼にはやはり存在しなかった (Kazin 1971: 400)。重要なことは、社会学や人類学の視点に存する「根本的な価値は、歴史に潜む推論を必要とする豊かさをそれらがさらに増加させた」ことだと彼が理解していた点にある (Hofstadter 1956: 364)。歴史事象はすべからく複雑であり、よってその複雑さを理解しようという歴史家は、その結論が根拠薄弱で暫定的なものである可能性を、常に受け入れねばならない——これこそが、社会科学の知見に触れたことでホフスタッターが確信した事柄であった。ここに至り、彼の考える知識人の使命は、普遍的な説明を与えるというある種の傲慢さとは、もはや無縁となる。

むしろその使命は、固定化された解を拒否して新たな問いを発していくこと、その問いを通じて知識の地平を拡大させていくこと、そしてこれらすべての作業の結果として、社会の中の多様性に道を開いていくこととなったのである。

だがこうした確信を得た 1950 年代初頭、ホフスタッターの目の前に突如として、その確信とは対極の出来事が現れた。その出来事こそ、マッカーシズムに他ならなかった。

4. 知識人としての使命感を胸に

1950 年代以降のアメリカでは、マッカーシズムの荒波が消え去った後も、幾度となく知性や知識人への脅威が訪れ、社会の多元性が危機に晒された。時代はいわゆる「コンセンサスの時代」を離れ、ホフスタッター言うところの「ゴミくずの時代 the age of rubbish」(Hofstadter 1970a: 15) へと向かうが、彼はこの間も歴史家としての職務を全うしつつ、1970 年の死に至るまで知識人としての使命を果たし続けていく。この約 20 年の間にホフスタッターが多様な社会や言論に対する脅威と見なし、知性による批判的検証の矛先を向けていったもの——それがデモクラシー・専門主義・暴力の、主として 3 つであった。

(1) デモクラシー批判

ホフスタッターの「デモクラシー」に対する違和感、すなわち「大衆 mass」に対する警戒感と、「境遇の平等」(トクヴィル) がもたらすその同調化圧力に向けられた拒否感は、彼の知的遍歴の実はかなり初期に始まる。デイヴィッド・ブラウンによれば、独ソ不可侵条約に端を発するマルクス主義への不信感、共産党やそれを支持する「労働者階級」への不信にも、同時に繋がっていった (Brown 2006: 25-6)。ただし、それが彼の作品の中で明確な形で現れてくるのは、やはり 1950 年代以降のことである。マッカーシズムの経験はこの点でも決定的だったと言ってよく、それはホフスタッターにとって「トラウマ」となるほどに、大衆の心理やその心理が動かす諸制度に疑いの気持ちを抱かせたようだ (Brown 2003: 533)。こう

して彼は、特に左派の議論に目立つ大衆への感傷的な理想化を、その後は全面的に排するようになる。大衆の中に見られる偏見や排他性、非合理性、平準化圧力のもたらす抑圧性などを、彼の批判的知性は次々と告発していくのである。

このホフスタッターによる告発の最も顕著な事例として、革新主義時代のポピュリズム思想を分析した『改革の時代』(1955 年) を挙げることができる。当時の一般的な解釈では、ポピュリストを改革志向の進歩主義者、後のニューディールに先立つ「民主的」な勢力と見なすことが、普通であった。ところがホフスタッターは、その序章で「私はポピュリスト・革新主義の伝統に批判的だ」(Hofstadter 1955b: 12) と述べ、ポピュリストは過去にノスタルジアを求める反動主義者であり、反移民・反ユダヤ感情の強い人種差別主義者でもあると論じたのである。ポピュリストの「負の側面」を前面に出したこの解釈が歴史学的に見て正当かどうかは、争いもある¹¹⁾。しかし、既存の理解に果敢に挑戦を突きつけたその姿勢は、批判を旨とする知性の人・ホフスタッターの真骨頂を表したのと言ってよいだろう。しかもそこでの批判は、過去の事例を掘り起こしていくという歴史家としての本分に沿いながら、「デモクラシー」が社会や言論の多元性に対して脅威となり得ることを示したのもであったのである。

彼の批判的知性はまた、こうした過去の事例のみならず、現代アメリカ政治の大衆運動にも向けられていく。「似非保守主義」や「パラノイア政治」の研究において彼は、そうした運動に共鳴する大衆の心理を分析しながら、そこに顕著に見られる執拗なコンフォーミズム、つまり社会や言論の多元性に対する脅威の存在を示してみせた (Hofstadter 2008: 3-92)。さらに、「デモクラシー」の平準化圧力が問題化する領域として、「民主主義教育」についてもホフスタッターは容赦なく批判していく。彼はその教育に見られる知性軽視の傾向などを批判するが、しかしそこでのさらなる問題は、その教育が平板な個人を作り出すことに努力を傾注している点であった。彼に言わせると、「デモクラシー」の名の下に行なわれ

たその「教育が第一に目指していたものは・・・子どもたちが消費や趣味、娯楽や社会的従順さといった世の習わしを学べるよう手助けすること、すなわち・・・受動的で快樂主義的なスタイルにうまく適用できるようにすること」に他ならない(Hofstadter 1963: 356)。多元性は、教育の場面でも深刻な脅威に直面している、というわけである。

以上のような「デモクラシー」への仮借ない批判がホフスタッターの政治的「変節」と受け取られたとしても、不思議はなかろう。たとえば彼の院生時代の恩師マール・カーティは、そうしたホフスタッターを見て、彼が保守的な思潮に感化されてしまったのではないかと危惧したという(Brown 2003: 537)。確かに、ホフスタッターの議論には、大衆蔑視とも読み得る部分がある。しかし、「デモクラシー」の正当性がほとんど公的イデオロギーと化しているアメリカで大衆を批判した場合、そうした反応を受けるだろうことは、ホフスタッターも十分承知していたことだろう。むしろここでは、彼がその火中の栗を拾うことに躊躇しなかった事実こそが、特筆されるべきである。批判を旨とする知性はいかなる対象も聖域化してはならないのであり、特にそれが社会や言論の多元性を制約しかねない場合、ホフスタッターにとってそれは、知性による検証への免罪符とはけっしてなり得ないはずのものだったのである。

(2) 専門家時代に対抗する多様な知性

アメリカ社会の知性や知識人への攻撃には真っ向から反論したホフスタッターであったが、同時に彼は、現代が専門知を有す「専門家 expert」の時代だということも、明確に認識していた。今や社会は著しく複雑化し、専門知をもたない一般人が理解できる事柄は、あらゆる領域で減少の一途を辿っている。政治の世界ですら、そこでの「知性に対する評価や認識はその時々で変化するかもしれないが、専門知の必要性に限っては、恒常的に増大し続けているのだ」(Hofstadter 1963: 229)。たとえば、革新主義の時代やニューディール期に「知識人と一般民衆」の友好関係が成立し得たのは、民衆の利益となる政策を推進するうえ

で、専門家に備わる技能が欠かせなかったからである。1957年のスプートニク・ショックが白日の下に晒したのは、現代世界では専門知をもつ者の存在が国家の命運すら左右する、ということであった(Ibid.: 4-5)。要するに、見方を変えれば、現代ほど「知」が社会に影響力を発揮できる条件が整った時代はないのである。

しかし、知識人にとってこの「専門職の興隆」が手放しで喜べる事態でないことは、当然ホフスタッターにも気づかれていた。そうした懸念のひとつは、彼ら知識人が狭量な専門分野の中に閉じこもってその他一切のことに無関心を決め込んでしまい、「精神なき専門人」(ヴェーバー)と化した彼らの知性が、そこに本来備わっているはずの批判的姿勢をもはや発揮し得なくなってしまう、との危険である。だが、この件に関してのホフスタッターの危惧は、興味深いことに、知識人が社会からの「離反 alienation」を望みかねないことに、むしろ向けられていた。知性による社会への働きかけを知識人が自ら遮断することの方を、彼はより危険視していたのである。確かに、いずれの形であれ知識人が社会に関与すれば、その過程で彼らは一定の妥協や迎合、周囲への同化を時に余儀なくされる。それゆえ知識人は「社会に認められ、組み入れられ、利用されていくにつれて、自分たちが単なる体制順応的な存在になり始め、創造的で批判的、真に有益な存在とはなり得なくなる、との恐れ」(Ibid.: 393)に苛まれるわけだ。その場合、こうした恐怖を回避する最も有効な対処法は、社会から、特に権力から距離を置くことであろう。実際、そのような選択を礼賛する傾向が体制批判的な当時のアメリカ知識人の間で目立ち始めているというのが、ホフスタッターの見立てであった。

だが彼は、知識人の恐れるそうした危険がジレンマだということは十分承知しながらも、社会からの退却が少なくとも全知識人の選択すべき道だとは考えない。これは、知性が社会やそこでの言説に対して批判的に関与することを知識人の使命と考えたホフスタッターの視点からすれば、当然の反応であろう。そもそも人類史の中には、古典

古代期のギリシャや啓蒙期のヨーロッパのように、多数の知識人が社会や権力に関与し、同時代人のみならずその子々孫々に大きな財産を残した時代が存在した。人類の道徳的な進歩が知識人の主導で成し遂げられてきた部分は、少なからずあるのである。よって、現代の知識人を取り巻く環境は確かにそうした時代のそれとは同一ではないが、人類の進歩を促すという先人たちも為した役割から現代の知識人が全面的に降りてしまっただけなのか、とホフスタッターは問い質す (Ibid.: 426-8)。

ただ、社会や権力への関与が知識人としてあるべき姿を揺るがす危険性は、確かに存在する。そこで、それへの処方箋としてホフスタッターの示した解が、知識人における「多様性 diversity」の確保、およびその拡大であった。「様々な性格や気質、生活状態、知的スタイルをもつ者たちが知的共同体の中に存在するとき、知的生活それ自体も社会へのニーズも、よりよく満たされるはずだ」(Hofstadter 1961: 598)。さらに、その多様な知識人同士の間で、特に権力に関わる者とそうでない者との間で交流が持続することの大切さを、ホフスタッターは説く。「社会全体にとって重要なのは、知的共同体が二つの部分に回復不能なまでに分裂してしまうべきではない、ということだ」(Hofstadter 1963: 429)。これは、その両者の間にたとえ対立があったとしても、そこに関わり合えるだけの自由さがあがり続ける限り、共同体の中にはその双方のバランスを備えた知性が生まれるはずだ、というホフスタッターの確信から来ている。そもそもアメリカ社会の健全さは、彼に言わせれば、その中に様々な要素が混在し、しかもその相互間で自由な交流が行なわれてきたことに存するはずだった。

物事を単一色に染めるのではなく、多様な色が存在し交錯する状態を積極的に認めること。社会のあり方に関する理想を含んだホフスタッターの多元主義は、専門家時代における知識人共同体のあるべき姿としても、擁護されたのである。

(3) 暴力の噴出と二大政党制

1960年代のアメリカを襲った激動の時代は、

社会に様々な混乱が引き起こされた時代でもあった。社会の不安定化とともに数々の暴力がアメリカの国内外で噴出し、ホフスタッターにとってそれは当然、無視し得ない事態と映る。だが、当時の彼をとりわけ震撼させたのは、大学という「知の殿堂」ですら、暴力が跋扈してしまっていたことだろう。知性の自由な行使だけが本来そのアイデンティティであるべきはずの場で、人間の身体や思想を恐怖の力で抑え込もうとする暴力が振るわれたことは、大学が自らの存在事由を否定したに等しい憂うべき出来事であった。ゆえに、暴力的行為とは対極に位置する知性の力を何よりも重んずるホフスタッターが、そうした大学の状況を厳しく批判したのも不思議なことではない (Hofstadter 1968c: 583-9)。しかし同時に歴史家でもある彼は、アメリカにおける暴力の歴史を辿ることで、この社会の底に滞留する暴力性の告発をも、自らの課題としたのである。

この告発の主眼は、アメリカ社会とは歴史上恒常的に暴力を経験してきた「暴力社会」(Hofstadter 1968d: 112) に他ならない旨を、暴露することであった。ホフスタッターの見るところ、アメリカ人は自分たちの社会を徳性豊かなそれだと思える傾向が強く、その暴力性を認識することに極めて鈍感である。しかし、「アメリカでの暴力を知り始めた者にとって、最も印象に残ることは、暴力が驚くほど繰り返されてきたことであり、歴史の中でそれが実に自然視されていることであり、しかもそれが今日に至るまで続いてきたことだ」(Hofstadter 1970b: 7)。アメリカ社会のさらなる特徴はまた、暴力に対して極めて寛容であること、そしてその再発を消極的にではあれ受容する傾向が高いことにも、観察されるという (Hofstadter 1968d: 112)。ホフスタッターはこうしたことすべてをアメリカ史に出現した様々な暴力の列挙で示そうとしており、そこでの語りは極めて陰鬱である。しかし、自身が見出した批判的知性の役割にあくまでも忠実でいようとする彼は、暴力をめぐるアメリカの自己イメージについても、怖気づくことなく果敢に挑戦していったのである。

さらに彼の知識人としての使命感は、こうした

暴力の噴出を前に、別の研究課題——アメリカ二大政党制の起源に関する研究——にも彼を赴かせていく。その成果が1969年に出版された『政党システムをめぐる思想』であるが、本書で彼は、「建国の父」が「党派 faction」の出現を危険視していたことや、合衆国憲法の成立後に政党システムが幾度も消滅の危機に瀕したこと、ところが19世紀初頭には二大政党制が様々な力学によって定着していった逆説などを丹念に描き出している。そのアプローチは歴史のアイロニーや弁証法的展開を見出していくという、徹頭徹尾歴史家のそれであり、よって本書に政治的なメッセージは必ずしも明示されていない。ホフスタッター自身も序文の中で「この書物はアメリカの二大政党制を正当化するために書かれたものでも、ましてや激賞するために書かれたものでもない」と記している (Hofstadter 1969: xi)。

とは言え、同時代に向けられた彼の言外の意図は、本書からは明らかであった。象徴的なことに、デモクラシーの維持と発展には自由な反対党の存在が不可欠だと見なした政治家マーティン・ヴァン・ビューレンを論じた章で、本書は閉じられている。しかもホフスタッターは「西洋における自由なデモクラシー国家の完全なる発展のためには、政治的な批判や反対が……一つないし複数の反対党の中で具象化されねばならない」とも述べているのだ (Ibid.: xii)。本書の出版とほぼ同時期に行なわれたインタビューでも、民主的な政治制度の下では競合し合う政党があってこそ、一般市民たちは適切な政治的影響力を発揮でき、安定的な政治秩序を作り出す合意にも至ることができる、と彼は主張している (Hofstadter 1970c: I 158-9)。システムに対する無秩序かつ暴力的な反対が噴出していた当時のアメリカの現状を前提にしたとき、こうした言葉にはやはり、ある種の政治的含意が込められていたはずであろう。

もちろんそうした言葉は、現状の二大政党制に対する支持の表明とも受け取れる。それだけに、本著作がホフスタッターの政治的保守化を明確に証拠立てるとの指摘も (Howe and Finn 1974: 18)、故なしとしない。実際、資本主義どころか

ニューディールに対してすら批判的だったラディカルな彼の過去を鑑みるなら、一見現状肯定的にも映るそこでの主張は、大きな様変わりと言い得る。だが、ダニエル・ジョゼフ・シンガルも指摘するように、社会の多元性を擁護することにそのねらいはあったという点で、ホフスタッターはやはり一貫していた (Singal 1984: 995-6)。1960年代後半、彼の目の前で起きていたのは、しばしば既存の価値や秩序を破壊しようとするだけの、それも少なからず「左派」によって行なわれた暴力やイデオロギー政治の跋扈であった。とするなら、批判を旨とする彼の知性がそれに抗し、アメリカの伝統的政治秩序を擁護する側に回ったとしても不思議はない。彼の知識人としての本懐は、「進歩派」や「左派」の行為や思考すらも、知性による批判の例外とはしなかったのである。

重要なのは、彼の立場が保守へと「変節」したかどうかではない。目の前の支配的な思想や言説、社会のあり方に対し、常に批判とオルタナティブとを突きつける知識人・ホフスタッターの姿勢こそが、我々が注意を払うべき対象なのである。

5. おわりに

アメリカ史研究者としてのホフスタッターの業績は、極めて多岐に渡る。クリストファー・ラッシュの言を借りれば、「彼の想像力は一つ所に長く留まることを知らず、彼の思考が及ぶ範囲は広大で、政治史・社会史・文化史を含み……アメリカ史のあらゆる時代に広がっている」(Lasch 1973: 7)。本稿で触れた著作に限ってみても、反知性主義はもとより、社会ダーウィニズム、革新主義、「似非保守主義」、政党システム、暴力、教育など、彼が論じたテーマは実に幅広い。そして言うまでもなく、広範な知識に支えられたこの関心対象の豊富さこそは、ホフスタッター歴史学に備わるひとつの魅力である。だが他方でそれは、研究事象に対する彼のこだわりの欠如、ひいては、視点のぶれやすさの証左とも映る。冒頭で触れたホフスタッターに関する先行研究の少なさは、この彼の業績に見られるまとまりのなさとも案外関係しているのかもしれない。

しかしながら、本稿で示してきたように、社会で知性が果たすべき役割に対する使命感という点で、ホフスタッターの姿勢は極めてブレのないものであった。彼のもつ好奇心の広さもあつたろうが、むしろこの使命感が、ホフスタッターをして、その関心対象を極めて広範なものにさせたのではあるまいか。彼にとって、社会や言論の多元性を擁護することは知性に課せられた、あるいは知性を行使する知識人に課せられた、最重要の役割である。この役割に殉じる意識がホフスタッターは強かった分、多元性を否定する現象や言説が現実を生じた時、彼はその対象に自らの関心を移動させざるを得なかったわけだ。しかも彼は、自身の歴史学研究と同時代の諸問題に対する自らの関心とを、常に関連するものとして考えていた (Hawke 1960: 136)。だから目の前の対処すべき問題が変化をすれば、彼が知性を行使する関心対象もまた、それに応じて当然変化をしたわけである。

ホフスタッターのいわゆる政治上の「変節」も、その原因は彼のこの知性観に帰せられる部分が少なくないのではないか。知性のあるべき姿は、何物をも鵜呑みにはせず、自らの解にすらも、疑いの目を持ち続けることにある。とすれば、その向かう先がマルクス主義であろうと、「デモクラシー」であろうと、左派系団体であろうと、知性はその前で批判を躊躇ってはならない。その対象が社会や言論の多元性を否定するものであるなら、それに対し、知性は批判を突きつけていくべきなのである。そう理解するなら、ホフスタッターが自身を「ラディカルなりベラル」と認識していたことにも (Howe and Finn 1974: 12)、得心がいく。なぜなら、彼はその時々の正統派に——たとえそれが一部の者にとっての「正統派」でしかなかったにせよ——常に批判の矛先を向ける、という意味で「ラディカル」であり続けたし、また解釈や社会の多元性を認め、それを奨励もするという意味で「リベラル」でもあり続けたからである。

『反知性主義』執筆の背後に知性をめぐるホフスタッターのこうした姿勢が存在していたこと

を、見逃してはならない。その著作を単に反・反知性主義の権威として利用するだけでは、そこに込められた知性や知識人の役割に関する彼の思いを、見逃すことになろう。知性の役割が社会や言論空間における多元性の維持にあることを歴史家としての仕事を通じて示し続けた人物、それがホフスタッターであった。この知識人としての彼の矜持こそ、現代日本の知的空間に携わる者たちが何よりも学ぶべき事柄ではあるまいか。

注

- 1) 田村哲夫の邦訳 (ホフスタッター 2003) では、著者名は「リチャード・ホフスタッター」と記載されている。他の邦訳等でも、日本語文献では彼を「ホフスタッター」と表記したものが少なくない。しかし本稿では、「ホフスタッター」の呼称で統一することにしたい。なお、ホフスタッターの著作からの引用訳は、すべて筆者自身のものである。
- 2) 『正論』の「特集・私の『反知性主義』的考察——君は、そんなに知性的なのか？」(2015: 319-37) に収められた一部論考など。もちろん、こうした状況とは一線を画し、現代日本の知性をめぐる現状の冷静な分析を呼び掛ける主張も、散見される (酒井 2015: 30-8)。
- 3) 『反知性主義』の精読を推奨するものとして、たとえば、竹内 2014: 64-7、森 2015: 89-90 など。
- 4) ホフスタッターと彼の議論を全面的に扱ったアメリカ人研究者による単行本としては、Brown 2006 があるくらいである。
- 5) 同様の解釈として、Brown 2003: 544 を参照。
- 6) ダニエル・ギャリーによれば、『アメリカの政治的伝統』の中で唯一好意的に扱われたのは、一般には広く批判をされてきたウェンデル・フィリップ——奴隷制廃止論者にして「煽動家」——のみであった (Geary 2007: 428)。
- 7) この卒業論文の一部は、ホフスタッターの処女論文として後に出版されている (Hofstadter 1938)。
- 8) ホフスタッターがいつマンハイムの議論に出会ったのかははっきりしないが、ベイカーは、それが1940年頃であったことを示唆している (Baker 1985: 165)。
- 9) この点は、同書の序文で明確に指摘されている (Hofstadter 1948: v-vi, xi)。Lasch 1973: 7-8 も参照せよ。
- 10) ホフスタッターの議論が「コンセンサス学派」に属すのか否かの論争については、Singal 1984: 976-1004 などを参照のこと。
- 11) 『改革の時代』におけるホフスタッターのポピュリズム解釈に異を唱えた論考として、Woodward 1959/60; Pollack 1960 などを挙げておく。

参考文献

- 泉昌一 (1974) 「R. ホフスタッター教授 (1916-1970) の遺作について」、『アメリカ研究』第 8 号、180-7 頁。
- 岩永健吉郎 (1951) 「リチャード・ホフスタッターの業績——米國政治思想史研究の一反省」、『日本政治學會年報政治學』第 2 号、194-204 頁。
- 内田樹編 (2015) 『日本の反知性主義』晶文社。
- 小田嶋隆 (2015) 『超・反知性主義入門』日経 BP 社。
- 笠井潔・白井聡 (2014) 『日本劣化論』筑摩書房。
- 斎藤真 (1988) 「訳者あとがき」、R. ホフスタッター『改革の時代——農民神話からニューデールへ (新装版)』(清水知久他 5 名共訳) みすず書房、293-7 頁。
- 酒井隆史 (2015) 「現代日本の『反・反知性主義』?」、『現代思想』第 43 巻第 3 号、30-8 頁。
- 佐藤優 (2015) 『知性とは何か』祥伝社。
- 佐藤優・斎藤環 (2015) 『反知性主義とファシズム』金曜日。『正論』(2015) 通巻 526 号 (9 月号)。
- 竹内洋 (2014) 『大衆の幻像』中央公論新社。
- 巽孝之編 (2008) 『反知性の帝国——アメリカ・文学・精神史』南雲堂。
- ホフスタッター、リチャード (2003) 『アメリカの反知性主義』(田村哲夫訳) みすず書房。
- 森政稔 (2015) 「反知性主義ポピュリズムと凋落する中道政治」、『現代思想』第 43 巻第 3 号、82-99 頁。
- 森本あんり (2015) 『反知性主義——アメリカが生んだ「熱病」の正体』新潮社。
- Baker, Susan Stout (1985) *Radical Beginnings: Richard Hofstadter and the 1930s*, Westport: Greenwood Press.
- Boorstin, Daniel J. (1963) “The Split-Level Tower”, *Saturday Review of Literature* (June 1), pp.19-20.
- Brown, David (2003) “Ethnicity, Progressive Historiography and the Making of Richard Hofstadter”, *The History Teacher*, 36, pp.527-48.
- Brown, David S. (2006) *Richard Hofstadter: An Intellectual Biography*, Chicago: The University of Chicago Press.
- Fass, Paula S. (1983) “Richard Hofstadter”, Clyde N. Wilson (ed.), *Dictionary of Literary Biography: Volume 17: Twentieth-Century American Historians*, Detroit: Gale Research Company, pp.211-30.
- Geary, Daniele (2007) “Richard Hofstadter Reconsidered”, *Review in American History*, 35, pp.425-31.
- Gillam, Richard (1977/78) “Richard Hofstadter, C. Wright Mills, and ‘the Critical Ideal’”, *The American Scholar*, 47, pp.69-85.
- Hawke, David (1960) “Interview: Richard Hofstadter”, *History*, 3, pp.135-41.
- Higham, John (1959) “The Cult of the ‘American Consensus’: Homogenizing Our History”, *Commentary*, 27, pp.93-100.
- Hofstadter, Richard (1938) “The Tariff Issue on the Eve of the Civil War”, *American Historical Review*, 44, pp.50-5.
- Hofstadter, Richard (1948) *The American Political Tradition: And the Men Who Made It*, New York: Alfred A. Knopf.
- Hofstadter, Richard (1952) “Manifest Destiny and the Philippines”, David Aaron (ed.), *America in Crisis: Fourteen Crucial Episodes in American History*, New York: Alfred K. Knopf, pp.173-200.
- Hofstadter, Richard (1953) “Democracy and Anti-Intellectualism in America”, *The Michigan Alumnus Quarterly Review*, 59, pp.281-95.
- Hofstadter, Richard (1955a) *Social Darwinism in American Thought*, Boston: The Beacon Press, revised edition.
- Hofstadter, Richard (1955b) *The Age of Reform: From Bryan to F. D. R.*, New York: Alfred A. Knopf.
- Hofstadter, Richard (1956) “History and the Social Sciences”, Fritz Stern (ed.), *The Varieties of History: From Voltaire to the Present*, Cleveland: Meridian Books, pp.359-70.
- Hofstadter, Richard (1961) “A Note on Intellect and Power”, *The American Scholar*, 30, pp.588-98.
- Hofstadter, Richard (1963) *Anti-Intellectualism in American Life*, New York: Alfred A. Knopf.
- Hofstadter, Richard (1968a) *The Progressive Historians: Turner, Beard, Parrington*, Chicago: The University of Chicago Press.
- Hofstadter, Richard (1968b) “History and Sociology in the United States”, Seymour Martin Lipset and Hofstadter (eds.), *Sociology and History: Methods*, New York: Basic Books, pp.3-19.
- Hofstadter, Richard (1968c) “The 214th Columbia University Commencement Address”, *The American Scholar*, 37, pp.583-9.
- Hofstadter, Richard (1968d) “Is America by Nature a Violent Society?”, *New York Times Magazine* (April 28), p.112.
- Hofstadter, Richard (1969) *The Idea of a Party System: The Rise of Legitimate Opposition in the United States, 1780-1840*, Berkeley: University of California Press.
- Hofstadter, Richard (1970a) “The Age of Rubbish”, *Newsweek*, 76 (July 6), pp.12-5.
- Hofstadter, Richard (1970b) “Reflections on Violence in the United States”, Hofstadter and Michael Wallace (eds.), *American Violence: A Documentary History*, New York: Alfred A. Knopf, pp.3-43.
- Hofstadter, Richard (1970c) “The Development of Political Parties”, John A. Garraty, *Interpreting American History: Conversations with Historians: Part I*, London: Macmillan, pp.I-143-60.
- Hofstadter, Richard (2008) *The Paranoid Style in American Politics and Other Essays*, New York: Vintage Books.

- Howe, Daniel Walker, and Finn, Peter Elliot (1974) "Richard Hofstadter: The Ironies of an American Historian", *Pacific Historical Review*, 43, pp.1-23.
- Kazin, Alfred (1971) "Richard Hofstadter, 1916-1970", *The American Scholar*, 40, pp.397-401.
- Lasch, Christopher (1973) "On Richard Hofstadter", *New York Review of Books*, 20 (March 8), pp.7-13.
- Lynn, Kenneth S. (1963) "Elitism on the Left", *Reporter*, 39 (July 4), pp.37-40.
- Pollack, Norman (1960) "Hofstadter on Populism: A Critique of 'The Age of Reason'", *Journal of Southern History*, 26, pp.478-500.
- Rosenberg, Harold (1963) "Two for the Seesaw: The Intellectual and the Common Man", *New York Times* (July 28), pp.6-7.
- Schlesinger, Jr. Arthur M. (1969) "Richard Hofstadter", Marcul Cunliffe and Robin W. Winks (eds.), *Pastmasters: Some Essays on American Historians*, New York: Harper & Row, pp.278-315.
- Singal, Daniel Joseph (1984) "Beyond Consensus: Richard Hofstadter and American Historiography", *American Historical Review*, 89, pp.976-1004.
- Woodward, C. Vann (1959/60) "The Populist Heritage and the Intellectual", *The American Scholar*, 29, pp.55-72.